

# INMP ニューズレター No. 10

2015年3月



International Network of  
Museums for Peace

## 国際赤十字博物館での展覧会

ジェノヴァにある国際赤十字博物館に新任したアレシア・バルベザット広報課長から、新しい展覧会のお知らせが届きました。「心理の実験:ガンジーと非暴力のイメージ」は2015年4月15日～2016年1月3日の会期で開催されます。

非暴力といってすぐに思い起こすのは、あの顔、あの笑顔、誰もが見たことのあるマハトマ・ガンジーでしょう。1927年、ガンジーは「自叙伝—真理の実験」を出版しました。題名は、民衆の不服従運動の基礎となった「サチャグラハ(真理の力)」を参照しており、ガンジーは生涯を通してそれを支持し体現しました。非暴力の思想と行動の礎であるガンジーの人生の物語は、非暴力芸術展覧会のための指針とタイトルにふさわしいものです。



展覧会のポスター

ガンジーの私的かつ霊的、倫理的、政治的な旅は、アンリ・カルティエ・ブレッソンによる一連の優れた写真を含む数多くの文書を通して、その全ての複雑性の中で明らかにされています。しかしながら、展覧会もまた彼の遺産に及び、「真理の実験」展は視覚芸術における強力な感動を与える力として非暴力を表現しているのです。この展覧会は、密教絵画や羊皮紙コーラン、ジャイナ彫刻、ビザンチンのアイコンなど約100点の作品によって、文化、芸術、技術の対話を起こさせるものです。

マルレーネ・デュマス、ダン・フレイヴィン、アマル・カンヴァル・キムスージャ、イブ・クライン、ロバート・ラウシェンバーグ、アイ・ウェイウェイなど現代芸術化たちも非暴力のメッセージを取上げています。

展示品の多くはメニル・コレクション(米国ヒューストン)所蔵のもので、その他は赤十字博物館、スイスの3美術館、アンリ・カルティエ・ブレッソン基金(パリ)のもです。

## テヘラン平和博物館： 平和のための映画監督、平和活動家、市長たち

2014年の第4四半期、数多くの平和活動の中でテヘラン平和博物館(TPM)では著名なゲストらを迎えました。映画監督や平和活動家、平和市長会議のメンバーがそれぞれの知識や経験を共有し、平和のメッセージを広げるために集まりました。有名なイランのアッバス・キアロスタミ監督は、イラン・イラク戦争(1980-1988)の間に使用された化学兵器をよく知るという特別な目的のために博物館を訪れました。キアロスタミ監督作品の中の1975年のショートフィルム「一つの問題への二つの解決法(Two Solutions for One Problem)」は、博物館を訪れた小学生に定期的に上映されており、彼らに平和教育を行っています。

キアロスタミ監督は、博物館でボランティアガイドをしている化学兵器被害者たちの数に圧倒されました。「博物館を訪れて、私達みなが退役軍人らに何かできることをするべきだと感じられた」と彼は語り、化学兵器の惨事を直に目撃した証言を訪問者らに語るというこのユニークな方法の有効性についてコメントしました。

11月、ベルグホフ基金のウリ・イエガーとアン・ロムンドを迎えることができ、「平和問題展」の開会式のスピーチをしていただきました。この展示会は世界中の成功している平和活動家たちを描いた25点のポスターで構成されています。ユネスコは、この「平和問題展」を平和の文化と非暴力のための国際10年の貢献と認めています。

さらに、TPMでは初の平和問題ワークショップを開催しました。平和の様々な定義や紛争の深刻化などについてのワークショップには、イラン、アフガニスタン、日本の社団法人日本国際民間協力会(NICCO)からの代表が参加しました。

TPMはまた、化学兵器禁止機関(OPCW)が主催する

第19回化学兵器禁止条約の締結国会議に参加するため、化学兵器被害者グループと国際法の専門家らをハーグに送りました。TPMの代表らは、当博物館の化学兵器被害者の平和への取り組みについて発表を行いました。



ベルグホフ基金のウリ・イエガーとアン・ロムンド

平和市長会議のイラン事務所であるTPMでは、12月8日、組織の副議長であるフロン市(ノルウェイ)のトレ・ヴェスピ市長をお迎えしました。ヴェスピ市長は、イランとノルウェーの平和市長会議加盟市間の相互協力の可能性について議論し、またカタブ市長とカラジ自治代表へ平和市長会議会員としての認可を示しました。

同日、TPMではルンド(スウェーデン)トランスナショナル財団平和未来研究所のヤン・オーバーグ教授をお迎えしました。教授は、博物館スタッフとボランティアに「新たな冷戦は形成されているのか？もしそうなら世界はどこに向かっているのか？」という題の講義を行いました。また、化学兵器被害者で当館のボランティアガイドであり、残念ながら11月にこの世を去ったアハマド・サンジバルディの告別式を行いました。詳細はこちらの[テヘラン平和博物館リンク](#)をクリックして下さい。

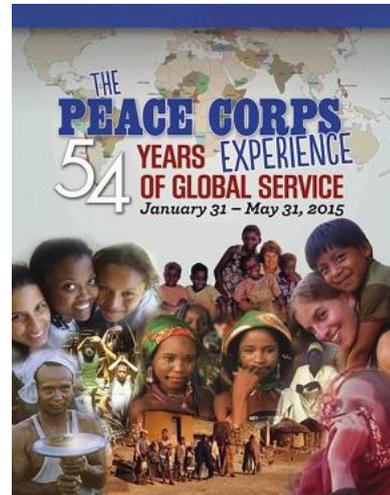
## デイトン国際平和博物館:アメリカ

デイトン国際博物館の2015年はワクワクする出来事で始まりました。当館が入っている1876年築の建物の修復がまもなく終了すると、マルチメディアやインタラクティブな展示、番組の放送、複数の部屋での展示が可能となります。この修復で当館の一階に集会スペースができ、そこで訪問者がライブ音楽を聴いたり、読書クラブやポエトリースラムに参加したり、コーヒーやチョコレート、会話を楽しむことが出来ます。また、当館では、2015年5月2日に初めての平和ヒーローウォークを開催します。この募金イベントの目的は、平和ヒーロー達の物語にスポットをあて、私達のコミュニティやもっと広い世界で非暴力によって暴力を減らす平和活動家の新しい世代を鼓舞することです。デイトン国際平和博物館へは、<http://www.daytonpeacemuseum.org> または、<https://www.facebook.com/DaytonInternationalPeaceMuseum> まで。

当館では、新しい企画展示「平和部隊の体験：世界を巡る54年」を開催しています。1960年10月14日、ジョン・F・ケネディは、大卒者らに彼らの2年間を発展途上国の人々を助けるために捧げてくれないかと申し出ました。そうした大統領の即席の選挙演説により平和部隊の考えが生まれたのです。54年後には、22万人の平和部隊志願兵が140の発展途上国で働き、食糧不足、気候変動、流行病などの困難を援助してきました。今日、平和部隊はこれまでになく重要であり、最新の技術やその実績で影響力を高めています。

「平和部隊の体験：世界を巡る54年」は、平和部隊の志願兵らの業績を賞賛し、彼らに続くよう勧めています。1月31日から5月31日までの展覧会は、南西オハイオ帰還志願兵機構(SORVO)との共同開催です。オレゴン歴史博物館(そして、オレゴン・ポートランド平和部隊体験博物館からの貸し出しにより)が展開したこの展覧会は、写真や短い談話で平和部隊の歴史をたどり、務めた国々を文書化し、志願・訓練過程を解説、海外

での生活や労働の体験を語り、任務終了後帰還した志願兵たちが対峙した問題について取上げています。帰還した平和部隊志願兵らの資料や衣類、記念品などがこの展覧会をさらに印象深いものにしています。



関連して、平和部隊帰還志願兵に関するパネルディスカッション、ストーリースラムや新兵募集イベントなどが行われました。ホームページは[こちらから](#)。

アフガニスタンの一流歌手、ウィーン平和ミュージアム(PMV)を訪問  
(PMV 委員 アリ・アマド)

アフガニスタンの歌手、作曲家で平和活動家でもあるファルハド・ダリアさんが、12月2日にウィーン平和ミュージアムを訪問し、過激主義に対抗する第1回国際キャンペーンを公表した。PMVの貢献者の一人であるダリアさんは、過激主義は人間性に対する最大の敵であり、宗教や政治を超えるものだと考えている。彼は、昨今の世界の過激主義は特定のイデオロギーではなく、ある種のライフスタイルだと言う。アフガニスタンは侵略や内戦など、暴力や過激主義に苦しめられてきた国である。過激主義は、部族主義、厳格なマルクス主義、権威体制や昨今のもろい民主主義など、様々なイデオロギーの元である。そのどれもが、アフガニスタンで音楽を検閲したり禁止しようとした。彼が言うには、独裁体制や反動組織は、人々を鼓舞する音楽の力を信じるゆえ

に音楽を封じようとしたが、タリバン(1996-2001)はイスラム的でないと音楽を禁止してきた。アメリカ率いる連合体が、2001年にタリバンを権力の座から降ろした直後、アフガニスタンの沈黙を破ったのはダリアさんの声と音楽だった。音楽は人の心に触れ、そこから様々な変化が生まれるのだと、彼は信じている。国際メディアは、アフガニスタンの否定的側面ばかりに焦点を当ててきたが、たとえ今は失われていても、この国には数多くの豊かな文化がある。どんな紛争にも文化的側面があるのに、紛争中は無視されてしまうのだ。音楽は人々を癒すことができると彼は言う。芸術は、人生で平和を知らない世代にも、平和を促し希望や感動を与えることができる、彼は信じている。過激主義の増加に憂慮しつつも、楽観主義は捨てていない。戦争で疲弊したアフガニスタンにおいて、最も影響力のある歌手の一人として、自国で新しい音楽の波を起し、芸術の力を通して人々の間に平和と結束を進めたいと言う。ダリアさんは国連開発計画の親善平和大使で、「アフガニスタンの声」と呼ばれている。「人生は美しい」というアフガニスタンでの一連のコンサートは、何万人もの人々を惹きつけた。そして現存の勇士としてウィーン平和ミュージアムを訪れ、音楽や芸術を通しての「過激主義への闘い」を表明したのだ。アフガニスタンの離散民のためにヨーロッパ公演をスタートさせた彼は、12月5日にオーストリアセンターで演奏する。私たちミュージアムは彼を「平和勇士」と認め、2014年6月以来、ウィーン中心部のブルートガッセの「平和の窓」でも、彼を取り上げている。



ファルハド・ダリアさん(中央:メガネをかけてネクタイを

している)

### オーストリアのベルタ・フォン・ズットナー (ウィーン平和ミュージアム館長 リスカ・プロジェクト)

2ユーロ硬貨の横顔、彼女の名に因んだ幾つかの学校があるにも関わらず、オーストリアにはベルタ・フォン・ズットナーのことを思い出す人がほとんどいない。彼女はノーベル平和賞を受けた(1905)初めての女性であり、アルフレッド・ノーベルが賞を創設するのにも影響を与えた人である。ウィーン郊外の人里離れた場に彼女の記念額があり、彼女の名に因んだスクールボードもある。中心街の保険ビルの中にも、かつてそこに住んでいたことを示す記念額があるのだが、そのビルは鍵がかかっている上に判りにくい所にある。以前は外側にあったが、玄関が改修されてから内側に移動されたのだ。ところが昨年、変化が生まれた。日本の実業家で平和慈善家である小松昭夫さんが、ズットナーの名を広めたいと、ウィーン平和ミュージアムに6か月間、彼女の胸像を提供しようとしたのである。その像は、オランダ人芸術家、イングリッド・ロレマさんによって創作され、ズットナーの胸像の中でも最も美しい作品の一つで、感動を与えるものである。ウィーン平和ミュージアムに6か月間、(日本のために創られた)胸像を置いてほしいという私の願いに、小松氏が同意してくれた時は嬉しい驚きを感じた。そして、もし常設できれば、ウィーン市やオーストリアにとって、どんなに良いだろうと思った。そしてついに、ズットナーの胸像が来ることになった。学童たちは彼女を見ることができ、彼女について読み、彼女が何よりも平和のため努力したことを知ることができるのだ。彼女は、国々は武器や野蛮な戦争ではなく、調停や法により紛争を解決すべきだと教えてくれた。国際司法裁判所がまさにそうである！ それは未来への希望だ。6か月間(2014年6~12月)、91000人の方々が、ミュージアムの中庭で像を見て、ガイドから学ぶことができた。ガイドたちは来場者に、平和教育を優先することで、彼女が成したことを説明した。約3000人の学童たちが、今まであまり知らなかった女性の姿を、じかに見ることができた。ウィーン平和ミュージ

アムで、約10万人の方々が彼女のことを知ることができたのだ。小松さん、ありがとう！ ウィーン、オーストリア、そして世界中からの人々が、より良い世界への道を示す平和の勝者を知ることになったのである。



2014年6月18日 小松昭夫氏とPMV館長、会員によるズットナー胸像除幕式

## ウィーン平和ミュージアムの「レッドハンドデー」

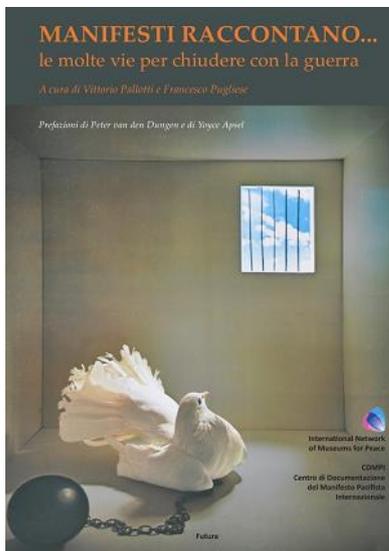
少年兵を使うことは、今日の最大の罪と悲劇の一つである。国連総会では2000年に「武力紛争における児童の関与に対する、児童の権利条約の選択議定書」を採択し、それは2002年2月12日から効力を発揮した。世界各国や組織はその日、少年兵問題に関心を促すためにイベントを催し「レッドハンドデー」として知られるようになってきた。ウィーン平和ミュージアムでは、その日の夕方、様々なアーティストや少年兵の状況に関する専門家などと共にイベントを持った。オーストリアの画家、ワーナー・ホーバスが描いたポスターのイラストは「子ども達が遊ぶ物」と称されている。



## 「ポスターは語る — 戦争を無くす多数の方法」

INMP 会員ヴィットリオ・パロッティとイタリアの平和歴史家フランチェスコ・ブリエーゼは、先日、「ポスターは語る — 戦争を無くす多数の方法」という題の素晴らしい本を出版しました。200 ページのその本は、カラーで復元された数多くのポスター(その多くは1ページを占める大きさ)で構成されています。ヴィットリオが長年かけてまとめたコレクションの一部で、ボローニャから程近いカザレッキオ・ディ・レーノの平和館「ラ・フィランダ」の国際平和ポスター・ドキュメンテーション・センターに収められているものです。これはこうしたコレクションの類でも世界で最も大きなもののひとつです。このコレクションと平和ポスターの保存はヴィットリオのライフワークとなっていますが、同様に重要なのは、平和教育のための展示に使用し続けることです。この本の各章では国際平和運動のさまざまな側面を大まかに捉えることができ、各イラストの解説によってポスターが伝えようとするメッセージをよりよく理解、評価することができます。最終章には、政治的ポスターの本質を分析し、その重要性を測るいくつかの論文が含まれています。新しいソーシャルメディアの時代においても、この地味な

ポスターは、なおも重要な役割を果たし続けています。役員のピーター・ヴァン・デン・デュンゲンとジョイス・アプセル(その他の文も寄稿)が序文を寄稿しています。



ヴィットリオ・パロッティとフランチェスコ・プリエーゼの本のカバー

中身の充実した魅力的なこの本の価格は 20 ユーロ(送料別)でこちらからオーダーできます

[vittoriopallotti@libero.it](mailto:vittoriopallotti@libero.it)。既に翻訳がほぼ完成している英語での電子版は、今年後半にオンラインにて発行する予定です。

フランチェスコ・プリエーゼはまた、19 世紀から今日までの国際平和活動の歴史を記した見事な本の著者でもあります。本の題名は「戦争を打ち倒せ:19 世紀から今日までの平和活動と人々」。2013 年に出版され、数多くのモノクロ写真が物語を生き生きと描き出しています。この本の出版の後、2014 年 10 月 29 日から 11 月 7 日までボローニャにて展覧会が著者主催で開催されました。23 枚のパネルからなるこの展覧会は、その他教育機関、図書館や公民館などで開催されています。地方自治体からのサポート、また欧州議会からも後援を受けています。その戦争を避けようとした、また全戦争の廃絶のために闘った勇敢で先見の明のある人々や彼らの運動の物語を語るのには、世界中で第一次世界大戦開戦百

周年を記念する行事が行われる今日、間違いなく重要で時宜を得ているでしょう。詳しい情報についてはこちらまでご連絡ください。

[mfranz\\_pugliese@yahoo.itai](mailto:mfranz_pugliese@yahoo.itai)

.....

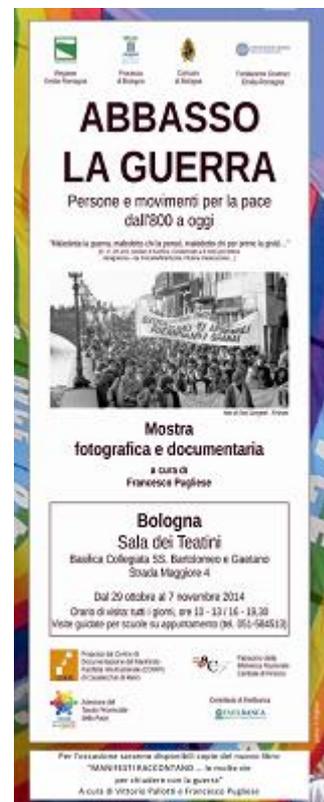
「平和というものは、最も断固たる努力と最も困難な犠牲を要する。それは戦争よりもさらなる勇敢さを要する。真実へのより強い忠誠と良心のより完全なる純粋性を要するのである。」

トマス・マートン

.....



イムジングク公園の平和宣言:2014 年 9 月韓国にて

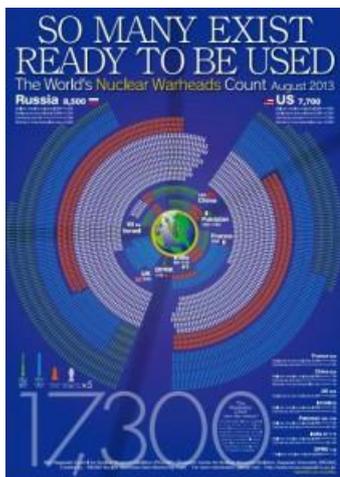


ボローニャ展覧会の告知ポスター

## 核兵器ポスター

約三年前、核弾頭データ監視のため長崎大学に核兵器廃絶研究センター(RECNA)が設立され、核弾頭の数や型、核兵器所有の各国にある核弾頭の状況などを可能な限り正確に評価しています。集められたデータはまた、各国や世界中の状況がすぐに理解できるように一枚のポスターにしています。この特筆すべきポスターは英語、日本語、韓国語版があり、[RECTAのホームページ](#)からダウンロードできます。

次のポスター(サイズ:A1、A2)は、[skiyama@nagasaki-u.ac.jp](mailto:skiyama@nagasaki-u.ac.jp)にメールをいただいても入手可能です。



## 平和のためのアート

「平和のためのグローバルアートプロジェクト」はこの20年、平和は武力によって維持するのではなく理解によって勝ち得るものだという考えのもと取り組んできました。このプロジェクトが成し遂げたものは昨年だけでも以下の通りです。

- 2014年の交流会で15000人が自らの平和のビジョンを作成し交換。平和のビジョンで私達の未来の種を蒔く。
- 交流会参加で平和教育の大学院過程を通じ、数百人

の教師が数千人の幼稚園児たちに関わる。

- 世界中の展覧会で319団体が平和アートを展示。平和の素晴らしいビジョンで何千人もの人に希望を与えた。

・「[平和のためのグローバルアートプロジェクト](#)」は平和教育の世界的リーダーとして認識されており、最近、トルコはイスタンブールでの有名な平和イベントに招かれた。教師やファシリテーター、地域のコーディネーターなどが学校や団体などにこのプロジェクトを紹介するツールとして使用するため、プロジェクトのサイトに[プレゼンテーションビデオ](#)を掲載。

これらは大変素晴らしいことですが、まだ始まりにすぎません。世界はついに、平和構築に各個人がいかに重要かということに気付き始めています。アートを通じて平和の文化を作るグローバルアートプロジェクトの取り組みに、エネルギーを注いで下さる個人、団体、学校を求めています。

今回のグローバルアートプロジェクト交流会は2016年4月です。登録は2015年5月から始まります。参加、ボランティアなどプロジェクト参画の方法は、平和のためのグローバルアートプロジェクトの[ホームページ](#)、[または](#) [peace@globalartproject.org](mailto:peace@globalartproject.org) にメールを。

## 若者の平和メッセージ



第8回国際平和博物館会議の開催中、平和教育地球キ

キャンペーンでは「若者の平和メッセージ」プロジェクトに参加した作品を展示しました。会議は終了しましたが、このプロジェクトはホームページ (<http://peacecreators.jimdo.com/>)、及び平和教育会議で継続していきます。2014年12月、日本で行われた「グローバル・ランゲージ(地球語)としての平和」会議でこのプロジェクトについてのプレゼンテーションが行われました。プレゼンのスライドはINMP会員と学校の平和教育者に送付可能です。ご興味があれば、このホームページの管理人である赤松敦子までご連絡ください。この展覧会は、6月オランダの「アンネ・フランクの家」が主催する国際教師セミナーの「ワールドカフェ」プログラムの中でも開催する予定です。このプロジェクトでは、若者達が平和の思いを表現するためにその他展覧会やコンテストも推進しています。そのようなイベントの管理者には、このプロジェクトへのリンクをぜひホームページに組み込むようお知らせ下さい。ホームページに掲載している作品は、印刷して博物館や学校での企画展示に使用できます。詳細は、[peacemessages555@gmail.com](mailto:peacemessages555@gmail.com) 赤松までご連絡ください。



ボスニア・ヘルツェゴビナ、バニャルーカ  
ブランコ・ラディチェビチ小学校からの平和アート

### 戦没画学生慰霊美術館「無言館」(長野県)

資料室長・林敦馬

戦没画学生慰霊美術館「無言館」は長野県にある小さな美術館です。館の名称からも察せられるように、日中戦争、そして太平洋戦争の戦時下にあっても、絵を描き

たい、彫刻を作りたいと願い続けながら、学業半ばで戦地に赴き、生命を散らすこととなった画学生たちの遺した作品や、彼らが使用していた絵の具やパレット等の画材、そして家族や知人にあてた書簡などの遺品を収集・展示しています。1997年のオープンの際は30余名の画学生の作品約100点から始まりましたが、18年目に入った現在では124名の戦没画学生の作品約700点を収蔵する美術館となりました。当館ではこれらを寄託というかたちでお預かりし、保存・管理につとめ、無言館のみならず、日本各地で開催する巡回展覧会で公開しています。また作品等の劣化を現状で何とか食い止めようと修復作業も進めております。

さて戦没画学生とひとことで言っても、その経歴はさまざまです。現在当館には作品の有無にかかわらず約500名の戦没画学生の情報が寄せられています。そのほとんどは美術系の学校で学んでいた若者たちです。無言館とは、ただ若者たちの生命、そして未来を容赦なく奪い去った戦争の事実と向かい合うことばかりではなく、差し迫った時代の中にあっても、ただ一筋に芸術への想いを持ち続けた画学生たちの心を伝える場であってほしいという願いのもとに運営されている美術館です。70年を経た今でも、彼らから現代を生きる私達に伝わるものがきっとあると思います。ただ単に悲しみの中に浸る美術館ではなく、生きる希望も受け取ることの出来る美術館、それが無言館のめざす美術館なのです。

開館から今年で17年、今も続々と新たな戦没画学生が判明し、無言館の活動は地道に進んでおります。しかし、これまで無言館に収蔵されてきた画学生は全て日本人です。ただ、当館が戦没画学生の情報をまとめた「戦没画学生人名録」(2000年発行)を編纂するために美術系の学校の学籍簿を調査した結果、韓国(朝鮮)や中国から日本の美術学校に留学していたとみられる戦没画学生の名前も僅かではありますが見つかりました。これからの無言館は、韓国や中国をはじめとするアジア諸国やヨーロッパにまで視野を広げ、第二次世界大戦下で命を落とした外国籍の戦没画学生(画家)たちを探し求めていきたいと考えています。それは私達の

無言館が、ただ単に日本の戦没画学生のみを紹介し、慰霊するための美術館ではなく、「すべての国の芸術家に自由と平和を」という、無言館創立期に掲げた理念を堅持し、あらためて多くの方々に無言館の存在意義を伝えていきたいとの考えからです。そして外国籍の戦没画学生の生きた証しともいべき作品があって初めて無言館は本当の無言館になるものと私達は考えております。

さて現在、私達は日本という枠を外して純粋に戦争によって未来を閉ざされた画学生を探し始めていますが、今のところ、これから紹介する2人の情報を頂いています。これを契機として新たな戦没画学生を掘り起こしていければと考えております。まずは日本人の銃口の先にあったアジアの人々に目を向けていこうと思っているのです。

私達はこれから、国の枠を越えて1人でも多くの戦没画学生の情報を探り求めていきたいと思えます。どんな小さなことでも構いませんので情報をお寄せ下さればとてもありがたいです。どうか宜しくお願いいたします。



無言館

## 国立公民・人権センター (米国ジョージア州アトランタ)

エドワード・W・(テッド)ロリスは、2014年6月に開館したアトランタ(米国ジョージア州)のダウンタウンに新しいミュージアム「国立公民・人権センター」に注目し、最近訪れました。彼によれば「大変素晴らしい平和ミュージアムです」

3つの主な展示のひとつが、キング牧師がガンジーの

非暴力抗議の教えと方法、そしてヘンリー・デヴィッド・ソローの「市民としての抵抗」に出会い、1948年に社会学士を取ったモアハウス大学(アトランタ)のマーティン・ルーサー・キング・ジュニア・コレクションからの企画展であるマーティン・ルーサー・キング・ジュニア・コレクション・ギャラリーです。モアハウス大学で、彼の将来のキャリアとなるアメリカ市民権運動のリーダーとしての基盤が築かれたのです。2つ目の展示は市民権運動の歴史、3つ目は世界の人権についてです。

どちらの展示も最新式の電子機器を活用しています。例えば、1963年のワシントン大行進の映像はどれも最小でも幅15mの4プロジェクターIMAXで写せるよう編集されています。また大変効果的なのは、どのように人権が(人種、性別によって)踏みにじられてきたかを来館者に語る様々な国の人権被害者達の何十もの等身大ビデオでしょう。アトランタは近代の米国市民権運動の類のないリーダー的役割を担っており、人権センターでは、この遺産を生かして全ての人々に「過去を振り返り、現在を変え、明るい未来を作る」力を与えたいと考えています。

初めにこのセンターのアイデアを提案したのは、有力な市民権運動家であるイヴリン・G・ロウエリーとアンドリュー・ヤング(前国連米国大使)でした。プロジェクトは、2007年、当時アトランタ市長であったシャーリー・フランクリンによって始められました。その前年、他の市や企業の有力者らと共に、貴重なマーティン・ルーサー・キング・ジュニア・コレクションが彼の母校を永住の地とするのに必要な金額を集めることに成功しました。このセンターはジョージア水族館、ワールド・オブ・コココーラ(コココーラ社からの提供地)という二つの主な観光名所に隣接しています。センターのその他の写真はこちらからご覧ください

[\(http://mashable.com/2014/06/24/national-center-for-civil-and-human-rights-atlanta-photos/\)](http://mashable.com/2014/06/24/national-center-for-civil-and-human-rights-atlanta-photos/)。



国立公民・人権センター

## 平和のための博物館市民ネットワーク会議

10月25-26日、平和のための博物館市民ネットワークの年次会議が明治大学平和教育登戸研究所資料館にて行われました。資料館は2010年に開館しましたが、概要とその沿革については[ホームページ](#)をごらんください。

登戸研究所は、戦争には必ず付随する「秘密戦」(防諜・諜報・謀略・宣伝)という側面を担っていた研究所であり、そのため、その活動は、戦争の隠された裏面を示しているといえます。登戸研究所の研究内容やそこで開発された兵器・資材などは、時には人道上あるいは国際法規上、大きな問題を有するものも含まれています。明治大学は、登戸研究所の研究施設であったこの建物を保存・活用して登戸研究所という機関のおこなったことがらを記録にとどめ、大学として歴史教育・平和教育・科学教育の発信地とするとともに、多年にわたり、登戸研究所を戦争遺跡として保存・活用することをめざして地道な活動を続けてきた、地域住民・教育者の方々との連携の場としていきたいと考えています。

16の平和ミュージアムから27名が参加し、様々な平和ミュージアムにおいてナショナリズムをどう扱うべきかなどといった様々なトピックについて議論が行われました。[ミュージアのニューズレター](#)には、英語と日本語の記事が掲載されています。

## 戦争のない世界は可能でしょうか

ジェーン・ヒューズ・ジヌー

皮肉屋さんは、戦争のない世界という理念をばかにし

ます。けれども年毎に、「ユニバーサル・ピース・デイ」(UPday)を祝って世界平和を心から望む、世界のいろんな地域の個人やグループは増えています。UPdayの創始者の、ニューヨーク在住の写真家でありデザイナーでもあるスー・ゼンは、このように彼女のビジョンで人々を啓発しているのです——今日、世界各地で報道されている暴力の蔓延のもとでは、そうした理念は何か迂遠なもののように思われるのですが。最初のUPdayはニューヨークのセントラル・パークで1984年8月5日に行われました。この日一杯、米国による広島への原爆投下を記念するために、人々は瞑想し、式典を開き、音楽やダンスに興じ、詩によるパフォーマンスを行い、子供たちは平和のお絵かきをしました。このアイデアは続く数年にわたり、オーストラリア、ニュージーランド、日本、メキシコ・シティー、そして東欧のグルジアに広がり、平和そして戦争のない世界のビジョンを褒めたたえるために、各国の人々がそれぞれのやり方で式典を執り行ってきたのです(次のサイトを参照:

[www.universalpeaceday.org](http://www.universalpeaceday.org))。

2007年には平和のために鐘を鳴らす行事がUPdayの式典に加えられました。その年のホスト役であった荘厳なリバーサイド・チャーチで始められたのです。2013年には、8月5日の日にニューヨーク市の9つの教会、さらには全米・全世界の祈りの家々で鐘が鳴り響きました。1人のグルジア人が書いています。「鐘の音、それにキャンドルライトとともに私たちはヒロシマ・ナガサキの記念日を祝い、ニューヨークのピース・デイのフォークにあるように、『恐怖の記憶を再び生命への献身に転換しようとする世界の人々の列に参加』したのです」と。スー・ゼンも「第二次世界大戦の終結における米国による日本への原爆投下の圧倒的な恐怖を、戦争のない世界における生命への献身に転換するのは、決して容易な祝宴ではありません」と言っています。

平和活動家たちは、彼女のアイデアをロマンチックな夢物語だとして一顧だにしない懷疑家たちに直面してきました。けれども彼女は、世界各地で鐘の音を響きわたらせることによってその目的を堅持しています。歴史が彼女を応援しています。20世紀には人々の意識に

おける変化が、いくつかの社会的な問題に関して蒙昧と排除からより大きな寛容と国際的な認知への転換をもたらしました。献身的な活動家たちの持続するエネルギーと忍耐が社会的な問題の「現状維持」を変えたのです。一般の人々が変革は可能だと一旦認識すると、真の変化が不可避となるのです。運動の初期においては、普通の人々の反応は「そんなことは決して起こらない！ 人生とはそういうものだ」といったことでした。こうした反対運動が広がり、時には暴力的になったにも拘わらず、人々は正義と人権の大義に参加し続けたのです。今ではテクノロジーが発達し、地球上の誰もが他の人々と瞬時につながることができます。社会変革のための思想や関与は瞬く間に広がるのです。

2008年にスー・ゼンは初めて平和ミュージアムと出会い、親しみを覚えました。日本の京都に招待され、平和ミュージアムの国際ネットワークの会議でUPdayを紹介するスピーチを行ったのです。そこから彼女はインスピレーションとして、UPdayの概念にニューヨーク市平和ミュージアム(NYCPM)を創設するアイデアを得ました(次のサイトを参照: [www.universalpeaceday.org](http://www.universalpeaceday.org))。

NYCPMは今や理事会をもち、コンサートやその他の行事を行う一方、ヨーロッパ、日本、米国およびその他の国々にすでにあるような、建物を備えた完全なミュージアムを計画しています。今日、戦争のない世界に関して多くの本や論文が書かれ、公的な対話が真剣に行われ、戦争のない世界の現実の可能性が確実に信頼性を得つつあります。2001年以来、少なくとも3つの本が「戦争の終焉」という同じ題名で出版されています。デヴィッド・L・ロビンズ(2001)、ポール・K・チャペル/ガヴィン・ド・ベッカー(2010)それにジョン・ホーガン(2012)です。戦争のない世界の方角に向う人間社会をテーマにしたその他の本も多く出版されています。ホーガンは次のように言っています。「戦争廃絶の最初の一步はそれが可能であることを信じることである」と。

1970年代以後、調停の実践——中立的な人物を招待して、人々の争いを解決するために論争者をファンリテートする——が、伝統的にも拘わらずほとんど利用されていなかった実践から世界中で行われるようになって

た信頼される技能にまで発展しました。調停は、人々が争いごと——個人的であれ、社会的であれ、組織的であれ、国際的であれ——を解決するのに非暴力的手段を選択する1つの良い例です。熟練した実践家であれば、見解が硬直して心の奥底に根付いているとき、あるいは当事者が二元論——すべては正か誤か、悪か善か、真か偽かのどちらかとみなす——に基づく競争を深く信じているとき、調停はきわめて困難であることを良く知っています。しかし最近の数十年に、科学はこうしたアプローチに挑戦し、生のすべての形態は実際には相互に関連し、相互に依存し、大いに協力し合っていることを明らかにしてきました。ますます多くの人々が、こうした現実の持つ全き意味を徐々に把握しつつあるのです。しかし、このことは意識における複雑な変化を必要とするために、その実現には数十年はかかるでしょう。

今年の8月5日、ニューヨーク市で行われるUPdayの参加者は、原爆が投下されたきっかり午後7時15分(米国東部夏時間)、鐘を鳴らすでしょう。ユニオン・スクウェア・パークにあるガンジー像でのイベントは、アメリカ原住民の儀式によって始まり、続いて世界各地から来た平和活動家による音楽・言葉・ダンスによるパフォーマンスが行なわれ、世界平和記念旗の掲揚によって締め括られます。

今年は、ニューヨークでの式典参加者には「平和的生活のための道具」——敵意(個人的であれ国家間であれ)から協働へ、注意をシフトさせるための簡単かつ強力な5つの提案を示したカード——が与えられます。世界のどこからでもどうか式典に来てください。鐘を鳴らし、それぞれの属する共同体の祈りを1分間捧げた後、「イマジン」を歌い、戦争のない世界へのコミットメントを誓います。「ユニバーサル・ピース・デイ」のような運動に参加することは、21世紀における偉大な新しい出来事の認識につながります。それはまさにスー・ゼンが言うように、「平和は可能である。それは私たちの究極の運命だから」にはほかなりません。

本稿の著者については次のサイトを参照してください: [www.janehughesgignoux.com](http://www.janehughesgignoux.com)。または次のアドレスに連

絡してください: [janehg4@verizon.net](mailto:janehg4@verizon.net).



水辺の仲間 by Pegge Patten (US)

## 2020年までに1000の平和都市を

ジェイ・フレデリック・アーメント

### 世界平和都市 常務理事

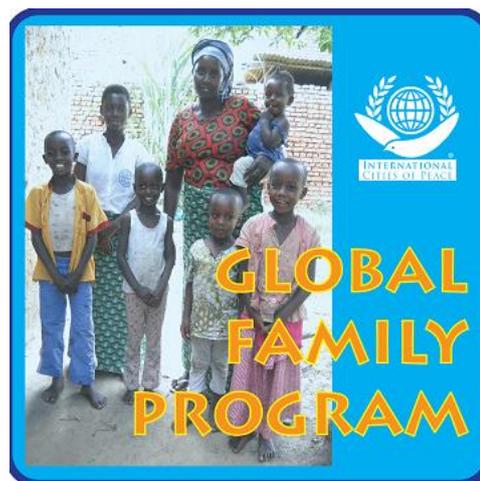
世界平和都市(ICP)は、自分が所属する共同体を平和のための都市と自ら定義する(意図的に、また高い志を持つ草の根運動によって)市民またはグループによる会員制の組織である。5大陸の100以上の都市が会員になっている。各都市の平和イニシアティブは、そのビジョン、ミッション、戦略においてそれぞれ独自である。それは、平和の文化を求めるユネスコ決議に定義された、より平和な社会を建設するために強力な行動をとろうとしている。2020年までに1000の平和都市を樹立しようとする組織の目的は、2014年に始められた。世界中の草の根運動の高まりが、平和のための条件やインフラストラクチャーを創造している。とりわけ、ICP指導者による世界諮問委員会の貢献が大きい。

事実、国の平和省(Department of Peace)を設立しようという多くの人たちが抱いているビジョンは、小さな小文字の平和の様々な部門("de" departments of peace)を作り出すことによって勢いを得つつある。多くの共同体が、平和構築の価値をもつより責任ある政府を保証することを仕事とする、委員会や協議会を形成している。これら人権委員会のような小平和部門は、資源の共有や革新的な統治とともに、共感できる政治や維持可能な経済、参加型政治過程とその透明性、修復的正義な

どに焦点を当てる活動を行っている。IPC協会は、世界の平和的な共同体が戦略や最適行動を共有するネットワーク作りを手助けすることによって、平和を促進し、平和のための草の根インフラストラクチャーの高度化を促進している。IPCの世界家族計画(The Global Family Program)は、すでにそれを必要とする世界の共同体に資源と支援を提供し、とりわけ持続的なビジネス戦略の構築に注力している。

世界平和都市が、差別と暴力ではなくて、ローカルそしてグローバルな平和の文化を推進している未来を想像してみよう。平和活動家が、世界の様々なイベントに効果的に影響を与える未来を想像してみよう。とりわけ、INMPとの協働を通じてICPの指導者は、2020年までに1000の平和都市を樹立するという目標を達成し、さらにそれ以上の成果を上げることができよう。平和ミュージアムの創設を通じて平和都市になることを望んでいる共同体があるなら、ICPのメンバーはその共同体における平和都市イニシアティブの形成を通じて協働することができる。より詳細な情報は次のアドレスにemailされたい:[info@internationalcitiesofpeace.org](mailto:info@internationalcitiesofpeace.org).

たとえば、ブルンジのブジュンバラでは、ICPが支援する世界家族計画は戦争でレイプされた女性の家族に食糧支援や「貧困をなくすための8匹の山羊」と名付けられたビジネスプランを作成する活動を行った。



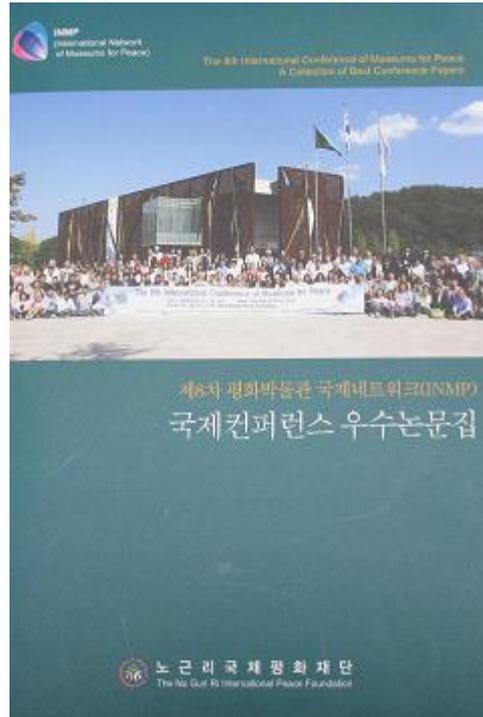
## 新刊情報

### 『第8回国際平和博物館会議:精選論文集』

The 8<sup>th</sup> International Conference of Museums for Peace: A Collection of Best Conference Papers

韓国のノグンリで開催された会議に出席できなかった INMP 会員およびニューズレターの読者は、最近出版された『第8回国際平和博物館会議:精選論文集』で会議に提出された最良の論文を読むことができる。490 頁の大部の本書は、ロイ・タマシロと山根和代によって編集され、韓国のノグンリ平和博物館財団によって出版された。基調報告を含む 20 本に近い論文が、125 本の論文、パネル、シンポジウム報告、基調報告から精選されている。多くは英語と朝鮮語で、その他は英語のみで書かれている。主題としては、コスタリカ、ケニア、シエラレオーネにおける平和博物館、中国のジョン・ラーベ平和博物館、そして日本の中帰連平和祈念館、女たちの戦争と平和資料館などの個別報告がある。その他は、歴史の真実、記憶、そして和解などである(全ては会議で取り上げられた)。会議の組織者でありノグンリ平和博物館財団の議長でもあるチャン・グド博士の、朝鮮戦争時のノグンリ事件の記憶に関する裁判や試練の記述もある。執筆者はアジア、アフリカ、アメリカ、そして欧州からの参加者であり、35 カ国からの参加——会議の新記録——があった会議の国際的な性格をよく示している。チャン氏は、世界共同体、とりわけ平和を絶望的に望んでいる朝鮮の人々に対する、会議と本書の出版の重要性を語っている。巻末の 20 頁にわたるカラー写真は、会議の様子や参加者の表情を克明に伝えている。本書は次のアドレスから注文できる:

[conference@nogunri.org](mailto:conference@nogunri.org)。定価は 1 冊 30 ドル(送料別)。



### 『平和構築』

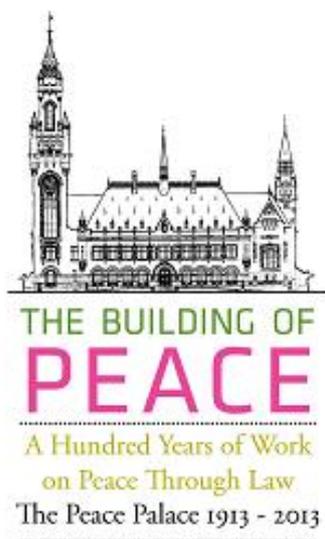
The Building of Peace

オランダのハーグにおいて 2013 年 8 月-9 月、平和宮の

100 周年を記念する広範囲にわたる様々な行事が行われた(INMPも参加した)。式典行事の一環として、オランダ・カーネギー財団が新しい書物を出版した。財団が所有し管理する建築物およびそれが場所を提供しているいくつかの機関の仕事(第一のそして主要なものは国連の国際司法裁判所)に関する書物である。500 頁の印象的な本であり、平和宮において 2013 年 8 月 28 日に展示された。美しく装丁され、あらゆる点において平和宮の

100 周年記念としてふさわしい。魅力の一つは、300 もあるイラストレーション(大部分はカラー)である。さらには、60 頁にわたるカラー写真とエッセーによる読み物があり、「パレスにおける生活」のあらゆる側面を叙述している。本書は一般読者向けであるものの、専門家が読んでも有益だ。大きく 2 つの部分からなり、第 1 は、第 1 回ハーグ平和会議が開催された 1899 年以後における国際法の発展の歴史であり、第 2 は、建物や機関

そしてそこで仕事をする人々と読者が会うことのできる気楽なエッセーである。2人のオランダ人の著者のうち、1人は歴史家の Johan Joor であり、もう1人は法哲学者の Heikeina Verrijn Stuart である。本書は英語、フランス語、オランダ語で出版されている。INMP 会員とニューズレターの読者は出版社の好意で定価の 20%引きで購入することができる(定価 45 ユーロに対して 36 ユーロ、送料は別)。ただし特別購入期間はこのニューズレターの発行日から1カ月。関心の向きは、ソースコード'PEACE2015'を書いて次のアドレスに連絡されたい:[sales@elevenpub.com](mailto:sales@elevenpub.com)。



### 『旅と平和のための国際ハンドブック』

The International handbook on Tourism and Peace  
本書は次の HP からダウンロードできる。

[http://www.uni-klu.ac.at/frieden/downloads/International\\_Handbook\\_on\\_Tourism\\_and\\_Peace\(2\).pdf](http://www.uni-klu.ac.at/frieden/downloads/International_Handbook_on_Tourism_and_Peace(2).pdf)

ピーター・ヴァン・デン・デュンゲンとテッド・ルイスがツアーリズムに関する章に寄稿している。

### 『ヒロシマ:グローバルな記憶文化の起源』

Hiroshima: The Origins of Global Memory Culture  
ラン・ツヴィーゲンベルク著

Cambridge University Press, 2014  
詳細な情報はこのサイト [website](#)。

### 『語りつごうヒロシマ・ナガサキ』

安齋育郎編著、新日本出版社

若い世代向けの5部からなる日本語の著作。(1)天からふってきた悪魔、(2)キノコ雲の下で何がおこったか、(3)歴史からまなぶもの、(4)核兵器とは何だろう、(5)平和を考え、行動しよう。戦後70年を迎え、学校の図書館で本書が子どもたちに広く読まれることを著者は望んでいる。



### 編集ノート

2015年からのINMPニューズレター編集のため、新編集委員会が立ち上がりました。メンバーは安齋育郎、ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン、ロバート・コワルチェック、山根和代です。翻訳のお世話は谷川佳子さん、翻訳は竹田敦子さん、寺沢京子さん、藤田明史さんが担当して下さいました。

INMPの会員そしてニューズレターの読者のみなさん、次号への投稿をお願いします。

ニューズレター第11号の締め切り

次号は2015年5月に発行の予定。原稿の締め切りは2015年5月15日(500単語以内、写真は1-3枚)。あなたの名前と所属を書いて、[news@inmp.net](mailto:news@inmp.net) に送付してください。